井尻公民館だより　（2024 年 3 月1日発行）

＜令和６年３月号＞　　（第 240 号）

＜連絡・問い合わせ先＞館長　窪田　道忠（[redacted]）
主事　相澤陸奥実（[redacted]）

おらが世やそこらの草も餅になる　　小林一茶

絵手紙愛好会　　小澤澄子

各地から春の訪れを告げる、様々な便りが寄せられて来ています。そこかしこで春の気配が感じられる季節になりました。

この季節になると「三寒四温」という言葉があるように、暖かい日が数日続き、ようやく冬が終わったかなと思っていると、急に寒さが戻ったりします。まだまだ寒さが残る今日この頃です。

梅の花のほのかな香りも感じ、やわらかい春の日差しが嬉しい季節になっております。

３月は、卒園、学校卒業、定年退職とそれぞれの人生の新しい時間スケジュールが始まっていく節目ともなります。

月日の経つのは早いもので、公民館活動一期（令和４年～5 年度）も、終わりの月となりました。コロナも「5 類」に変更になり、規制緩和になったとは言え、思ったようには活動が出来ない状況で有りました。地域の皆さん、利用者団体の皆さん、ご苦労ご迷惑をおかけしました。

また、ご支援ご指導頂いた運営委員会の皆さん方もご面倒有難うございました。

次期は新たな体制で行っていきます。引き続き、井尻公民館へのご支援ご協力を宜しくお願いいたします。

お知らせ

公民館･大掃除のお願い

- 日時：3 月 16 日　（土）　午前 9 時～
- お願いする方々・・・公民館利用者団体各１名以上

（絵手紙・書道・俳句・川柳・和太鼓・太極拳・ダンス・食生活改善推進員）
（手芸・運営委員）

1 月の活動報告

童謡フェスティバルに向けての童謡練習会

2 月 17 日（土）に生涯学習推進大会の「童謡フェスティバル」に井尻公民館として参加し、懐かしい童謡・叙情歌・唱歌と、合唱発表するための練習をしました。

今回の合唱曲目は「ゆりかごのうた」・「手のひらを太陽に」の二曲での練習です。

藤原和美・鶴田さゆり　両先生の指導で多く皆さんの参加を頂き楽しい時間でした。

豆知識　　禅の言葉

滅却心頭火自涼　（しんとうめっきゃくすればひおのずからすずし）

恵林寺の三門入口の左右の柱に表語版が掛けてあります、

「安禅不必須山水」・「滅却心頭火自涼」

これは戦国時代、恵林寺にいた快川紹喜（かいせんじょうき）和尚がこの句を唱えて火中に身を投じ火定したことでは有名である。

武田勝頼が天目山で滅亡した翌月（1582 年 4 月 3 日）恵林寺は織田・徳川軍の焼き討ちにより全山灰になりました。

その理由は、武田氏を滅ぼした織田軍はこの恵林寺に押し寄せ、潜伏保護している残党達を信長は引き渡すよう命じたが拒否された。怒った信長は、快川和尚他 100 余名の坊さんを三門の二階に封じ込め薪に油を注ぎ火をつけ焼き殺してしまった。

その折炎上する三門楼上で遺偈（ゆいげ）を唱え寺と運命をともにしました。

「案禅は必ずしも山水を須いず、心頭を滅却すれば火自ら涼し」

句の意味は「座禅には静寂で涼し場所が必要なわけではない、無我無心の境地であれば炎暑も苦にはならず、涼しくさえ感じられる」というものです。

直面する苦悩から逃げるのではなく、暑さなら暑さ、寒さなら寒さに徹底し自分を同化させてしまえば苦悩はおのずと消滅する、というもの、禅の考え方なのです。

無の境地にあった快川和尚は「炎なら炎に自分を同化させるまで」という心境にあつたのではないでしょうか。

私たちでも、無心に徹し目の前のことに集中せれば苦悩が苦悩でなくなることがありますね。

快川和尚は武田信玄の禅の師匠である、戦国武将、信玄は生涯 70 に近い戦いを行って来ている、心身への苦悩があり対話の中、禅の考えを心得していたのではないでしょうか。

信玄が武略より戦略を重視し、また戦いは勝つことだけではないという大局的な視野をもつようになったのは快川との禅問答からも、醸し出されたのだ。

信玄は自から恵林寺を菩提寺と定めている、これも住持に最適として快川和尚を撰んでいたのかも知れない。

文化コーナー

（川柳）（井尻公民館川柳愛好会）

2024／1／26

国会は烏合の衆の寄せ集め　（久保　晃）
集団のタスキと汗の晴舞台　（田辺たみ子）
大谷のグローブ笑顔集まる子　（古屋典子）
集団は昔は疎開今避難　（雨宮江身子）
集めてもまだ集めても足らぬ金　（石垣まさ子）
集会で話を聞かず雑談を　（中村廣一）
対話なく辺野古集中強行か　（関口正次）
集合に遅れて来るはいつも奴　（飯島武志）

（俳句）（井尻公民館俳句愛好会）

2024／2／10

余寒かな辻の地蔵の赤帽市　（飯島武志）
老二人畑の火囲む二月尽　（飯島和子）
卒年の余寒の畝に鍬盗られ　（増田英仁）
控え待つ農具に白き春挨　（小林昂平）
春の塵寄りてみぎわの縁飾り　（鶴田光子）
人の世のうれい隠して春の塵　（三椚　淳）
春の塵人差し指で書く絵文字　（三森美恵子）

（短歌）

立春を過ぎたばかりの周辺の　（古屋和子）
雪景色をばスマホに写す
如月にお茶の稽古の誘いあり
師の思い出に席は賑わう

元旦に思いもよらぬ大地震　（久保　晃）
能登の被災を見て茫然に
突然の天災受けし人々は
恐れ悲しみ如何ばかりかと